
所 報

1. 研究所活動報告

1. 研究プロジェクト

本研究所のプロジェクト「大学入試における学力テストと能力テストの比較研究」は、1982年度まで3ケ年間、私学振興財団による学術研究振興資金を得ておこなわれた。1983年度は、これの報告書をまとめるべく、各分担課題ごとに作業が進行している。各分担課題の主査は、原一雄（第一班）、星野命（第2班）、石川光男（第3班）および石本菅生（第4班）である。

さらに、1983年度私学振興財団学術振興資金（90万円）により、「アメリカ中等教育における対日観教育（歴史教育）の実情についての調査研究」（主査：B. C. デューク）が現在進行中である。

2. 研究員

国内外よりの研究員を受け入れて、研究・研修の便宜をはかっているが、今年度は以下の研究員が研究所に参加した。

a) 沈 綺云 (SHEN Gi-yun), 北京師範大学 (専任講師) 「閉回路テレビの研究」で、1982年10月より1983年3月まで。

b) Bruce La Brack, University of the Pacific (Associate Professor), USA., "Re-Entry Process of American & Japanese Students: The Hidden Challenge to Internationalism." July, 1982—August, 1983.

d) Lois Taniuchi, Harvard University (Graduate Student), "The role of okeikogoto programs in both socializing Japanese children to appropriate learning behavior and attitudes and socializing their mothers to the role of home teacher." March, 1983—June, 1983.

e) 粟飯原純子, 和洋女子短大 (助手), 「外国語教育における教育工学の適用」, 1983年4月—1984年3月

研究室活動報告

教育哲学研究室

教育哲学研究室の1981年度の活動は前年にひきつづき各メンバーの個別的研究を中心としている。なお、最近文部省や民間関係団体によって、現在教員養成制度、特に大学における教職課程改善の問題が検討されているが、本研究室関係者の多くが、私立大学連盟や関東・もしくは東京地区教育実習連絡研究協議会等の共同研究プロジェクトに参加して研究を進めている状況である。

金子武蔵客員教授

今年度も引続き「イエナ時代のヘーゲル」を主題とする演習を担当。

川瀬謙一郎教授

I 研究活動

前年に引つづき、ウェーバーの宗教社会学の方法論に基づいて、ヨーロッパ市民のエートスの伝統の研究、またこれとの対比における日本の社会のエートスの研究を継続し、教育における人間形成論、また価値観形成論の基礎を検討する試みを行っている。

II 学会・研究会等

- 1) 東京地区教育実習研究連絡協議会加盟校関係者を基盤とする文部省科学研究費による共同研究「教育実習の改善に関する研究」(代表者、小口忠彦教授—お茶の水大学)に研究協力者として参加し、第2分科会において、大学における教育実習の位置づけ、実習オリエンテーションの指導目標と内容等について事例研究を行っている。
- 2) 教育哲学会より会誌「教育哲学研究」の常任編集委員に選任され編集活動に参加している。
- 3) 学会参加;教育哲学会(立教大学, 9月21, 22日);社会思想史学会(名古屋大学, 10月2, 3日);日本デューイ学会(聖和大学, 10月16, 17日);日本倫理学会(玉川大学, 10月23, 24日)の各大会に出席。

III 著作等

「キリスト教における結婚・家庭観の伝統」, 小倉志祥編『人間と家庭生活』(「現代のエスプリ」別冊『家族とは、家庭とは』第4巻), 至文堂, 1983年4月10日発行, pp. 57~72。

讃岐和家教授

I 研究活動

- 1 キリスト教教育哲学の諸原理の研究
- 2 教員養成制度の研究
- 3 19世紀前半のドイツの教育哲学，とくにJ・F・ヘルバルトの教育哲学の研究

II 論文等

- 1 「キリスト教に基づく価値教育の哲学的根拠」，日本YMCA研究所（編），『価値教育』所収，1982年10月。
- 2 「児童・生徒における道徳性の発達」，「信濃教育」第1154号，1983年1月。
- 3 「キリスト教教育の価値論的枠組みと礼拝の問題」，キリスト教学校教育同盟（編），『キリスト教学校における教育の在り方——第3回研究セミナー報告——』，1983年7月。

III その他

- 1 日本教育学会 学会誌編集委員
- 2 一般教育学会 常任理事，学会誌編集委員
- 3 文部省 一般教育視学委員
- 4 三鷹市 社会教育委員，図書館協議会委員
- 5 日本私立大学連盟 教員養成問題検討小委員会委員
- 6 大学基準協会 単位互換制度検討委員会委員
- 7 キリスト教学校教育同盟 キリスト教学校教師養成事業委員会委員
- 8 1983年7月27日～29日に行われたキリスト教学校教育同盟第53回夏期研究集会において、「今日におけるキリスト教教育の課題」と題する発題を行った。
- 9 1983年8月30日，埼玉県市町村教育委員会調査統計担当者研修会で、「貿易摩擦と教育」と題する講演を行った。

B.C.Duke教授

I Research Activities

- 1 Field Research in England and America: The Pacific War in Secondary Schools, & Attitudes toward Japan and the Japanese by history teachers and their students.
- 2 Great Educators from Asia

II Publications

Variations on Democratic Education: Divergent Patterns in Japan and America, UNESCO International Review of Education, Hamburg, Germany, March, 1983

III Travel

Philippines, USSR, Poland, England, & the USA

IV Positions in Academic Societies

English Editor: The Journal of the Japanese Education Society

長 清子教授

I 研究活動

1. 個人研究として

- a. 近代日本における天皇制の研究
- b. 近代日本人, 特に在野の歴史意識
- c. 日本思想史における価値観の連続と非連続の問題

2. アジア文化研究所の同僚, および, アジア諸国の学者との共同研究

- a. 「アジアにおけるキリスト教比較年表」の作成
- b. アジア社会の近代化の学際的研究

II 著書・編書

1. 『近代日本哲学思想家辞典』中村元・武田清子監修, 東京書籍, 1982年9月30日刊, 776頁。
2. 『アジアにおけるキリスト教比較年表』(1796-1945), ICU アジア文化研究所編, (編集代表) 1983年3月20日, 創文社, 181頁。
3. 『わたしたちと世界一人を知り国を知る-』岩波ジュニア新書, 1983年8月22日, 岩波書店, 205頁。

III 論文

1. 「河合栄治郎の自由主義論—昭和前期の思想的位置—」ICU『社会科学ジャーナル』第21号(2), 1983年3月31日, 25頁。
2. 竹越與三郎の新日本史観—国民史のふところにある“世界史”—『歴史と社会』第2号, リポート, 1983年5月30日, 36頁。
3. 「リベラリズムと“帝国主義”の間—浮田和民の歴史意識—」『近代日本と早稲田の思想群像』早稲田大学社会科学研究所, 1983年5月31日, 28頁。

IV その他

1. UBCHEA (United Board for Christian Higher Education in Asia) 主催の the workshop on “Asian Folk Religions” を主題とする会議 (1984年度に開催の予定) の準備会に出席, 於フィリピンのマニラ, 1983年8月28日~30日。
2. 国際文化会館評議員, 教育哲学会理事, 同編集委員会常任委員, 日本イギリス哲学会理事, UBCHEA 評議員, 他

立川 明助教授

I 研究活動

19世紀マサチューセッツの高等教育史を主要な研究対象としている。本年度は、1850年代のハーヴァードと州政府の関係の変化の研究に力を注いだ。その成果の一部を英国オックスフォードでの国際教育史学会に於いて発表（1983年9月7日）するに先立ち、8月下旬からの約2週間、マサチューセッツ各地で高等教育史関係の資料を収集した。

II 学会発表等

『大学史研究会』年次セミナー（1982. 11. 26～28, 於磐梯）に於いて「ハーヴァードの《私立》化と科学技術教育」と題する研究発表を行なった。

III 著作

“The Struggle over the Lawrence Scientific School and the Return of Alumni Control to Harvard.” 『ICU教育研究』25, pp.1～26.

IV 日本教育学会『教育学研究』英文校閲係

大学基準協会 専門委員（教員養成）

林 昭道助教授

I 研究活動

教育の諸概念成立史を追う。近代ヨーロッパ、特にドイツを中心としている。昨年にひきつづきゲーテの著作及びその成立の背景を検討している。

松浦良充助手

I 研究活動

- 1) 教育思想史におけるLiberal Educationの概念に関する研究。現在は川瀬謙一郎教授の指導のもとで、今世紀アメリカの（高等）教育思想について上記の観点より研究を進め、「ロバート・M・ハッチンズ教育思想の研究」を主題として修士論文を作成中である。（その成果の一部を関東教育学会第31回大会において発表の予定）
- 2) 戦後日本の高等教育における一般教育をめぐる動向を歴史的に研究している。
- 3) ICUアジア文化研究所研究助手（非常勤）として、『アジアにおけるキリスト教比較年表』（ICUアジア文化研究所編，創文社，1983年）の出版をはじめとする研究所の諸プロジェクトの補助的作業に従事している。

II 著作（研究論文）

「ペスタロッチーの教育人間学」、『パイディア』第19号，同志社大学教育学会，1982年。

佐藤尚子助手

I 研究活動

近代中国におけるミッションスクールの位置と役割とに関して、資料を米・中両国から収集し、分析している。

II 学会発表

1982年9月28日 教育史学会第26回大会「キリスト教各派宣教会の対中国教育活動とミッションスクール」

1983年7月12日 日本比較教育学会第19回大会「1920年代中国のミッションスクール—ナショナリズムへの対応をめぐる日本とのちがいを—」

III 論文

1982年10月 『日本の教育史学』第25集「解放前中国における教育権回収運動とミッション系大学」—私立学校登録規定をめぐる—

村瀬良子助手

1. 「パウロ・フレイレの教育思想から学ぶこと—『伝達か対話か—関係変革の教育学』—」, 『大学キリスト者』第72号 (1983. 8)
2. ヘーゲルにおけるアイテールの概念

山室吉孝助手

I 研究活動

- (1) アメリカ・ピューリタニズムとW.ジェイムズとの関係についての研究。
- (2) アメリカ・ピューリタニズムとイギリス・ピューリタニズムとの関係についての研究
- (3) ヘーゲル研究 (金子武蔵客員教授の講義録編集に参加)

II 学会発表

- (1) 1982年度, 日本デューイ学会 (聖和大学) に参加し, 「J.デューイとピューリタニズムのエートス」の題目で発表した。
- (2) 1982年度, 教育哲学会 (立教大学) に参加。

III 研究論文

- (1) 「デューイとピューリタニズムのエートス」『日本デューイ学会』第24号, 1983年6月。(pp. 82~87)

心理学研究室報告

- 1982年10月7日 Dr. Martin Morf講演会, 「内向性—外向性の諸次元」というテーマで話された。16名が出席。

- ・1983年2月3日 心理学コロキウム 都留春夫先生が「スモールグループ経験に及ぼすリーダーの影響について」と題して、米国における先生ご自身のグループ体験を報告された。13名の参加者があった。
- ・2月5日 修論発表会が行なわれ、6名の発表がなされ活発に討議された。
- ・2月26日 卒論発表会が行なわれ、18名の発表があった。
- ・3月10～11日 研究室将来計画検討会が箱根対岳荘において行なわれ、都留、星野、原、栗山、向井の5名が参加。学部及び大学院の望ましいカリキュラムのあり方をめぐって討論を行なった。
- ・3月11日 1982年12月31日付をもって退任された土居健郎先生の歓送会が、駒場「こまばエミース」で催され、中川学長、大口教養学部長、大学院・教育学研究科長、教育学科の諸先生方、カウンセリングセンターのメンバー、心理学研究室スタッフが出席。土居先生御夫妻を囲み、スピーチを中心になごやかな歓談のひとつきであった。感謝の気持ちをこめて、ささやかな記念品、花束が贈呈された。
- ・3月23日 非常勤講師慰労会が西荻窪「山水楼」で行なわれ、筑波大学芳賀先生はじめ9名が出席した。
- ・5月13日 梅本堯夫先生（京都大学）講演会が本館4階音楽センターで行なわれた。演題「音楽心理学について」。音楽の生理学、コミュニケーション（芸術）としての音楽、音楽による表現とは？など、広い観点からのお話があり、素晴らしいピアノ演奏で締めくくられた。金沢先生はじめ52名が出席した。
- ・6月11日 6月卒業生の卒論修論発表会が行なわれ、卒論4編修論2編の発表があった。
- ・6月22日 「言語障害入門講演会」と題する第一回の学習会が催された。「言語障害概説」と題して飯高京子先生がお話になり、続いて「失語症について」と題して山崎美智子先生のお話があった。
- ・7月4～8日（3泊4日）恒例の「心理学サマーセミナー」が嵐山「国立婦人教育会館」で開催され、各テーマごとに分科会形式のセミナーがあり、討論を行なった。また、「ことばをめぐる問題」と題するシンポジウムや親睦を深めるための立食パーティなどの催しがあった。研究室スタッフ、院生、学部生など約60名が参加。
- ・7月15日 心理学専攻生の第1回同窓会が、西荻窪「こけしや」で行なわれた。これは、都留春夫先生が還暦を迎えられ、このお祝いを兼ねて、同窓生が呼びかけたものである。第1回生から、第26回生まで、約80名出席し、盛大な会となった。

原 一雄教授

I 研究活動

- 1) 視覚誘発位における大脳半球の機能的非対称性の研究
- 2) マウスの学習と記憶に及ぼすニコチン長期投与の影響に関する研究

- 3) 大学生の価値観研究——他大学および20年前のICU生との比較
- 4) 大学入試学習能力検査の妥当性の研究

II 学会発表等

- 1) 1983年7月13日, 日本動物心理学会第43回大会(於東京大学)において, 「マウスの反復逆転学習セットに及ぼすニコチン長期投与の影響(その2)」を発表, セッションBIの座長を勤めた。
- 2) 1983年7月15日, 日本専売公社健康と喫煙研究会(於葵会館)において「ニコチンとアルコールの相互作用」について発表。

III 著作

- 1) 「動物学習に及ぼすニコチンの影響 その4:マウスの記憶に及ぼすニコチンとエタノールの相互作用に関する研究」, たばこ総合研究センター, TASC研究報告, 83WA0708, pp. 17。
- 2) 「海外における私立大学間協力の動向——アメリカの事例を中心として」関西教授会連合会報 第33号(1982. 11. 10) 5~7頁。

IV その他

- 1) 1982年9月16日, 北海道会館における全国教授会連合第2回幹事校会の公開講演会にて「私立大学間の協力」について講演。
- 2) 「紫煙と時間」TASC monthly 9巻2号(1983. 2)3頁。
- 3) 1982年10月以来, 宇都宮大学教育学部附属養護学校, 精神薄弱教育研究会の指導助言を継続中。
- 4) 1983年4~9月, 千葉大学文学部における「心理学特講・生理心理学」に出講。
- 5) 1983年7月19~24日, 宮城教育大学特殊教育・言語障害児教育専攻科において「特殊講義A・聴覚の生理と病理」を集中講義。
- 6) 日本心理学会「心理学研究」, 「Japanese Psychological Research」誌の編集委員。
- 7) 日本基礎心理学会運営委員, 編集委員。
- 8) 日本生理心理学会運営委員, 常任編集委員ならびに英文アブストラクト委員。
- 9) 日本私立大学連盟・外国教育事情委員会主査。(1983年3月まで)

星野 命教授

I 研究活動

前年度に引続き1982年度も, 九学会連合の共同課題「日本の風土」に, 日本心理学会から参加し, 青山学院大学長谷川浩一氏とともに分担研究「幼少期の『原風景』としての風土」に関して, 全国19都道府県28短期大学の保育科または幼児教育科などの学生(総数1,600名)から, 新たに考案された質問紙法を用いて回答を集めた。質問は主として自由記述式によったが, 多肢選択法や感情微分法(F.D法)による回答

分析をも行なった。この結果は5月8日の九学会連合年次大会において口答発表し、また九学会連合編『人類科学』36号、1983に掲載される予定。

以上のほか1982年10月、12月、1983年4月および5月に「文化と人間」の会の研究懇談会・講演会等を主催し討論に加わった。またこの会の年報第1号ともいふべき『異文化間の心理①異文化との出会い』を1983年5月に川島書店から刊行した。B6判ペーパーバックの160頁で、座談会、個別論文4編、海外動向、研究の話題3編、書評7編のほか、会の活動と「あとがき」が含まれている。

II 学会発表等

9月26日及び12月12日、青山学院大学で行なわれた九学会連合主催「日本の風土」研究会に続けて参加した。

10月2日 乃木坂のビル内会議室で行なわれた第23回産業精神衛生研究会に出席した。

10月15～17日に九州大学で開かれた日本心理臨床学会の第1回大会に参加し、最終日のシンポジウム「心理臨床の将来像」にコメンテーターの一人として約30分発言した。

11月6日 東京学芸大学で開かれた異文化間教育学会東京地区研究会にコーディネーターの一人として参加し、講演及個人発表の司会をもつとめた。

11月7日 青山学院大学で開催された首都圏心理臨床懇和会において、「同性愛を疑われたが結婚によって終結した幼稚園教師とのカウンセリング」の事例研究の発表を行なった。これは2年以上にわたる治療面接の経過についての詳細の報告であった。

11月13日・14両日、仙台市内で開催された日本社会心理学会第23回大会において、特別テーマセッション「社会心理学における人間像」にコメンテーターの一人として参加し、約30分間の発言を行なった。その内容は次下のⅢ著作論文に含まれている記録集に掲載された。

11月19・20両日、大阪の商工会議所ホールで開催された日生財団主催のシンポジウム「親と子の絆（きずな）」に参加し、パネルディスカッションにおいて、約20分間発言した。

11月26～28日 筑波大学で開催された日本教育心理学会第24回総会に参加し、自主シンポジウムV「異文化間教育心理学の課題と展望」において、企画者と話題提供者として約30分発言し討論に加わった。（このシンポジウムの経過については、「教育心理学年報」第22集、104頁参照）

1983年3月19・20両日、新潟市ステーションホテル会議室で開かれた第8回コミュニティ心理学シンポジウムに参加し司会などをつとめた。

3月1・2両日同志社女子大学で開かれたアメリカ学会に出席した。

4月23・24両日に京都楽友会館で開催された異文化間教育学会第3回大会に参加した。

5月8日 都内旗の台にある昭和大学医学部で開催された九学会連合年次大会に参加し、日本心理学会会員として、「幼少期の原風景としての風土（その3）」の調査結果を口頭報告した。

5月8日 南青山のアジア会館においてハワイ東西センター文化学習研究所のDr. Richard Brislinによる講演会を「文化と人間」の会の主催で行なった。会員のほか都内各大学等からの研究者が約30名参加し盛会であった。

6月22日 ICUにおいて原教授と協力して「言語障害入門」セミナーを開いた。東京学芸大学の飯高京子教授による「言語病理学の動向」及び山崎美智子氏による「失語症の訓練と問題点」と題する発表を聞いた。

6月24・25両日、沖縄国際大学で開催された日本社会心理学会公開シンポジウムに出席した。

7月14・15両日、京都・京大会館で行われた“The Multi-Ethnic Society and its Implication for Intercultural Education”と題するアジア各国の教育研究者・地域研究者のワークショップに参加し、“Psychological Barriers of the Japanese in Understanding the Multiethnic Society”と題して口頭発表（英語）を行なった。

7月18・19両日カナダ、ヴァンクーバーのBritish Columbia大学で行われた社会精神医学に関する林宗義教授のセミナーに、日本からの精神科医、心理学者とともに出席し、その後市内の精神衛生コミュニティ・センターや病院の精神科救急室などを見学した。

7月21日から8月25日まで、ワシントンD.C.のホテルハイヤットリージェンシーで開かれた世界精神衛生連盟主催の世界会議及び理事会に出席し、日本の自助（Selfhelp）グループについて発表し、また西太平洋地区会を主催した。

さらに、この会期中の2日間の全体セッションの日本語への同時通訳を、ニューヨークのICU卒業生を通じて、また現地で活躍している別の卒業生に依頼し、日本人参加者の便宜をはかった。

Ⅲ 著作・論文

『パーソナリティの心理学』（古典入門 オルポート）第1章・第6章 有斐閣新書，1982，2-19頁。

「カルチュア・ショック」永野重史・依田明編，『文化のなかの人間』（発達心理学への招待7）第11章 新曜社，1982，215-255頁。

「新しい型の日本人の誕生——異文化の中で育つ子どもたち」荻野恒一・星野命編『カルチュア・ショックと日本人——異文化対応の時代を生きる』有斐閣選書，1983，171-194頁。（新倉涼子との共同執筆）

「日本人は異文化を生き抜けるか」同上221-251頁。

「複眼的あるいは散眼的視点」，『実証研究の背後にある人間』（日本社会心理学会

第23回大会シンポジウムにおけるコメント) 日本社会心理学会第23回準備委員会, 1983, 43~47頁。

『異文化との出会い』(「文化と人間」の会編) 川島書店 1983(5月), (斎藤耕二, 菊池章夫との共同責任編集)

「国際文化交流をさまたげるもの・うながすもの」『季刊人類学』14-2, 講談社, 1983, 142~149頁。

「幼少期の原風景としての風土」『日本の風土に関する総合的研究』(昭和57年度文部省科学研究費補助金) 研究成果報告書, 1983, 28~33頁, (長谷川浩一との共同執筆)

「子どもたちの異文化体験とアイデンティティ」小林哲也編, 『異文化に育つ子どもたち』第2章 有斐閣選書, 1983(7月), 29~61頁。

「グループ学習リーダーのあり方」, 『所内学習会要録』 佼成カウンセリング研究所, 1982。

「世界精神衛生連盟国際会議(マニラ)に参加して」『世界精神衛生会議レポート』(心の健康——'80年代の展望) 日本アイビー・エム株式会社, 1982, 64頁。

IV その他

前年度に引き続き, 日本心理学会「心理学研究」及び「Psychological Research」両紙の編集委員を担当した。また日本社会心理学会理事, 日本心理臨床設立発起人及び倫理委員会代表, 異文化間教育学会理事をつとめたほか, 新しく設立された日本・人間性心理学会の運営委員をつとめた。さらに, 1983年8月に開催された世界精神衛生連盟理事会において, 西太平洋地区副会長に再任された(1985, 夏まで)。

10月16日, 大阪基督教短大で行われた記念行事に参加し, 筑波大稲村博教授との対談を行った。

10月23日 ICU高校の課外行事として「心理学はどんな学問か」についてビデオを見せながら在校生約80名と懇談した。

10月30日 北陸学院短大付属幼児児童教育相談所15周年記念講演会において「親と子の絆と危機」と題して講演した。

12月8日 埼玉県東朝霞市中央公民館において同和教育講座の一部として, 社会的「偏見」について講演した。

12月26日より30日まで香港及びバンコクに渡航し, 香港大学心理学研究室にDr. David Hoらを訪ね, また香港心理衛生協会の方々の案内で香港市内のCommunity Mental Health Half-way House(中間施設)2か所を見学, またバンコクでは市内の幼稚園及び東洋第三のスラムと言われるKrong Toy Community Schoolを訪問し, 校長のPrateep Unthorntam女史と面談した。

1983年1月4日より7日まで中軽井沢星野温泉で催された全日本カウンセリング協議会の新春カウンセリングワークショップに世話人の一人として参加した。

3月2日 埼玉県西川口の鳩が谷公民館において、「社会的偏見と差別」について講演した。

3月9日 上野東京都立文化会館会議室において、海外事業協力協議会主催で「海外帰国子女の適応」について講演した。

4月9日 京都会館で行われた「季刊人類学」のための座談会に出席し発言した。

4月19日 芝公園福祉会館にてカナダから来日した「日本の保育」視察団に「東南アジアの子どもたち」についてスライドを見せながら講演した。

4月22日 駒場の東京大学教養学部心理学研究室で行われた心理学談話会に出席し、「異文化間心理学について」講演した。

8月7日より10日まで香川県の琴平グランドホテルで開催された「カウンセリングワークショップインコトヒラ」に世話人の一人として参加し、グループの一つを担当した。8月19日より22日まで愛知県伊良湖岬の国民宿舎「信州」で開催されたカウンセリングワークショップにも世話人の一人として参加し、グループの一つを担当した。

8月26・27日 石川県内灘町福祉センターで開かれたキリスト教幼稚園教師一泊修養会に講師として参加し、「母と子の絆」、「東南アジアの子どもたち」と題して二つの講演を行った。

8月29日より31日まで、都内富坂セミナーハウスでICU、東神大、聖心女子大ほかの学生8名を集めて行った「グループ体験合宿」に世話人として参加した。

次の諸大学の非常勤講師をつとめた。

1982, 11月下旬北陸学院短期大学保育科「精神衛生」(集中講義)

1983, 4月～7月聖心女子学院大学文学部「対人コミュニケーションの社会心理学」

都留春夫教授

I 研究活動

(1) グループ・アプローチ:

「リーダーのグループに及ぼす影響に関する研究」など

(2) フォーカシング:

(a) インストラクションの方法, (b) カウンセラー養成プログラムへの適用, など

(3) カウンセリング:

(a) 事例研究, (b) Experiential Psychotherapy, など

II 学会活動など

(1) 日本心理臨床学会第1回大会(福岡・1982年10月16～17日)では「リーダーのグループに及ぼす影響」について研究発表をし、また「エンカウンター・グループに関する研究」に対するコメントをつとめた。

(2) 集団療法研究会第4回集団精神療法シンポジウム(東京・1983年2月19日)に出席、同会の理事に就任。同ワークショップ(東京・5月21日)に出席、このあとの

理事会において同会は「日本集団精神療学会」と発展改称した。

- (3) 臨床的グループ・アプローチ研究会 (CGAI) 第3回研究会 (広島・1982年11月22～23日) でコメンターとなった。

同第4回研究会 (埼玉・1983年5月13～15日) ではシンポジウム『グループ・アプローチと私——いままで、いま・いまから』の司会をした。

Ⅲ 著作等

- (1) 「あるグループ・プロセスの記録」、『グループ・アプローチ』Vol.1 (1982) 8-14頁 (臨床的グループ・アプローチ研究会機関誌)
- (2) 「ジェンドリンのフォーカシング」(2)『カウセリング』Vol.14-4 (1982) 11-18頁 (全日本カウセリング協議会発行)
- (3) 「学生助育・厚生補導——学後の歩みをふりかえって——」『大学と学生』Vol.204 (1983)

Ⅳ その他

- (1) シンポジウム・発題「家族カウセリング」1982年9月11日 (東京・日本・精神技術研究所主催)
- (2) 大学院生のためのエンカウンター・グループ・ファシリテーター (逗子)
- (a) 1982年12月2～5日 (b) 1983年6月27～30日
- (3) フォーカシング・セミナー・講師
- (a) 1982年11月20～22日 (大阪・福岡人間関係研究会主催)
- (b) 1983年3月28～29日 (東京・日本・精神技術研究所主催)
- (c) 1983年7月13～14日 (東京・日本・精神技術研究所主催)
- (4) PCAワーク・ショップ・スタッフ
- (a) 1983年1月25～29日 (伊豆・日本精神技術研究所主催『PCAウィークエンド・No.77』)
- (b) 1983年4月30日～5月5日 (埼玉・人間関係研究会主催『Carl and Natalie RogersとのPCAワークショップ』)
- (c) 1983年8月18～22日 (山口・臨床的グループ・アプローチ研究会主催『宇部プログラム』)
- (d) 1983年8月26～30日 (伊豆・日本・精神技術研究所主催『PCAウィーク・エンドNo.82』)
- (5) フォーカシング実習指導
- (a) 1982年11月26～27日 (学生相談研究会主催『第20回学生相談研修会』)
- (b) 1983年8月23日 (町田市教育相談所主催)
- (6) 講演
- (a) 1983年2月5日「カウセリングの新しい波」(横浜・日本カウセリング協会主催)

- (b) 1983年3月3日「グローリアと3人のセラピスト」(東京・都立教育研究所)
- (c) 1983年4月18日「グローリアと3人のセラピスト」(調布市教育相談所)
- (d) 1983年6月21日「カウンセリングについて」(府中市・アジア極東犯罪防止研修所)
- (7) 青山学院大学大学院講師「臨床心理学」担当(1983年4月より1年間)
- (8) 月例東京ウォークキング研究会・スタッフ
- (9) 月例カウンセリング・ケース研究会(土曜日)メンバー
- (10) PCA・ウィークエンド・13時間(日本・精神技術研究所)スタッフ, 11月, 3月, 6月の第1土曜日 9時30分~22時30分
- (11) カウンセリング
 - (a) 面接担当 国際基督大学カウンセリング・センター(チーフ・カウンセラー)
 - (b) 面接担当 日本・精神技術研究所(カウンセラー, 週1回夜)
 - (c) スーパービジョン及び教育分析(日本・精神技術研究所)
- (12) 日本人間性心理学会, 評議員, 編集同人
- (13) 昭和58年度留学生交流研究協議会(東地区)

(主催 文部省・筑波大学)(1983年6月24~25日)において第1分科会(交流部会)の司会をつとめた。

栗山容子専任講師

I 研究活動

1. 初期言語発達と象徴遊びの発生に関する文献研究, 及びこれまでの実験の分析結果をまとめるために, 週一度開かれている研究会に出席し, 研究を進めている。
2. 言語発達に関する諸問題——言語獲得と認知発達の関連, 言語習得における母子相互作用の問題, 障害児の言語教育など——をテーマとした研究会で, 文献の紹介, 検討を定期的に行なっている。
3. 協同的条件, 競争的条件の2条件から社会的相互作用の発達を比較検討する目的で, 幼稚園児, 小学生2・4年生を対象に実験を実施し, 相互作用をとらえるための分析方法の検討, 分析の試みを行なっている。
4. 障害児への教育的援助の一環として, 同年令の子どもと対人関係を結べない情緒障害児と自閉的傾向があると診断された小学生に定期的に箱庭療法を中心とした面接を行なっている。

向井敦子助手

I 研究活動

- (1) 幼児におけるひらがなの読みと書きに関する研究
- (2) 心理学的行動図に基く行動の発現・展開・終止の条件の探索

(3) 3名の幼児を対象とした幼児の行動の形成と変容の過程の継断的観察

II 学会発表

1982年11月, 日本教育心理学会第24回総会において, 「ひらがな文字の構成因の検討 I 大学生によるひらがな文字の類似度の評定 II 幼児によって書かれたひらがなの検討 III 幼児による文字様図形の再生」を発表(同論文集P.94-99)(深谷澄男・川瀬正裕・斎藤蔄との共同研究, 向井はIIIを口答発表)

III 著作

「行動制御回路モデルにおける自己保存系としての態度」国際基督教大学学報I-A教育研究, 1983, 25, P.77-106(深谷澄男との共著)

IV その他

(1) 対人行動学研究会準備会出席1983年3月

(2) 非常勤講師

- ・日本女子大学家政学部「児童学研究法」(1982年, 1983年通年)
- ・横浜国立大学教育学部「児童心理学」(1983年前期)
- ・日本女子大学通信教育部「児童学研究法」(1983年夏季スクーリング)

視聴覚教育研究室

当研究室に事務局を置く日本視聴覚教育学会と日本放送教育学会は, 1982年11月29~30日に筑波大学教育機器センターを会場として, それぞれ, 第19回, 20回の連合大会を開催した。中野教授, 石本準教授, および大学院生が参加した。

<人の動き>

神山正人, 武藤栄一, 岩佐玲子, 佐々木輝美, 青木恵子(旧姓: 窪田)の5名が, 4月より非常勤助手に就任した。

なお, 6月には高柳康雄(元非常勤助手)が修士課程を終え, 8月には鈴木克明(元非常勤助手)がロータリー財団奨学生としてフロリダ州立大学に留学した。

阿久津喜弘教授

I 研究活動

- (1) 「学校内非行の原因およびその指導・対策に関する総合的研究」(昭和58年度科学研究費補助による総合研究)。
- (2) 日本型コミュニケーション・プロセスの研究——異文化との比較において」(昭和58年度三菱財団人文科学研究助成による共同研究)。
- (3) 「新・教育社会学辞典」の共同編集。
- (4) 現代教育研究会および日本文化会議コミュニケーション研究会の一員としての研究活動。

Ⅱ 著 作

- (1) 「『パブリック』化としての教育過程」『教職研修』11巻5号, 1983年1月, 76-79頁。
- (2) 「メディア再考」『視聴覚教育』37巻1号, 1983年1月, 27頁。
- (3) 『放送関係文献総目録Ⅱ 1967-1979』(共同編集)日外アソシエーツ, 1983年2月。
- (4) 「教師間コミュニケーションの活性化」『教職研修』11巻8号, 1983年4月, 35-38頁。
- (5) 「私の提言『人なきメディアは空虚であり, メディアなき人は盲目である』」『視聴覚教育』37巻5号, 1983年5月, 23頁。

Ⅲ そ の 他

- (1) 日本教育社会学会評議員・国際交流委員。
- (2) 日本視聴覚教育学会理事・編集委員。
- (3) 日本放送教育学会理事・編集委員。
- (4) 大学セミナーハウス 共同セミナー委員。
- (5) 司会「放送の社会的影響と放送利用の効果」全国放送文化研究協議会(国立社会教育研修所 1982年12月21日)。
- (6) 卓話「コミュニケーションとしての教育」東京三鷹ロータリークラブ例会(埼玉銀行三鷹支店 1983年4月22日)。
- (7) 講義「マスコミ・放送利用・通信教育」社会教育主事講習(国立オリンピック記念青少年総合センター 1983年4月28日)。

中野照海教授

Ⅰ 研究活動

- 1) 視聴覚教育の評価に関する研究(近日中に出版)
- 2) 文部省特定研究「大学放送教育学習方法の研究」(前年度より継続)
- 3) 文部省特定研究「大学放送教育番組適正化に関する調査研究」(前年度より継続)
- 4) 第2回大学放送教育研究シンポジウム「教育番組と学習方法の開発」にパネリスとして参加, 1982年11月18日, 東京。

Ⅱ 著 作

- 1) 「授業のモデルと放送番組」, 放送教育開発センター編『大学放送教育番組適正化に関する研究』, 1983年, pp. 34-62。
- 2) “Educational Technology and Teacher Education—How Educational Technology Can Contribute to Improve Teacher Education”『ICU教育研究』第25巻, pp. 105-116。
- 3) 「放送教育の近未来に向けて——その活性化の方向」, 『放送教育』, 1983年4月

号, pp. 12—26。

- 4) 「視聴覚教育：今後の展望」, 『教育資料』, 1983年10月号, pp. 22—26。

Ⅲ その他

- 1) 講演「視聴覚教材の教育的利用」, 秋田県生涯教育センター, 1982年11月2日。
- 2) 講演「放送教育番組の効果的選択と活用」長野県放送教育研究会, 松本, 1982年12月7日。
- 3) 講演「視聴覚教育の評価」, 全国視聴覚教育連盟研究会, 国立婦人教育会館, 1982年12月9日。
- 4) 講演「教授メディアの活用と評価」, 鹿児島県視聴覚センター研究会, 1983年1月27日。
- 5) 講演「放送教育をめぐる諸問題」, 富山県放送教育研究会, 1983年2月16日。
- 6) 放送「英語教育と放送の活用」(NHKラジオ), 1983年3月3日。
- 7) パネリスト「視聴覚教育の近未来」文部省主催視聴覚教育上級研修会, 代々木青少年センター, 1983年5月25日。
- 8) 講演「教育放送の効果的利用」, 埼玉県教育委員研修会, 1983年8月10日。
- 9) 学会等
 - a. 日本視聴覚教育学会常任理事, 同学会「視聴覚教育研究」編集委員
 - b. 日本放送教育学会常任理事, 同学会「放送教育研究」編集委員長
 - c. 「日本教育工学雑誌」(文部省・教育工学センター協議会, 邦文・英文) 常任編集委員, 編集幹事
 - d. 日本語学ラボラトリー学会評議員
 - e. 教育放送分科会(文部省社会教育審議会)委員
 - f. 「コンピュータと教育のあり方」小委員会(教育放送分科会)委員(主査)
 - g. 日本教育工学協会理事
 - h. 「視聴覚教育賞」(文部省・日本視聴覚教育協会)選考委員
 - i. 国立放送教育開発センター客員教授
 - j. NHK学校放送中央諮問委員会委員
 - k. 国立民族学博物館展示委員会委員
 - l. 東芝教育技法研究会論文審査委員
 - m. AVCC視聴覚教育国際協力委員会委員

石本菅生準教授

I 研究活動

- 1) VOCABURARY BUILDERの効果
- 2) 教材検索システムと検索語の妥当性について ケース・スタディー
- 3) スピード・リーディング・トレーナーにおける分散クイズと全習クイズの効果

4) 入学試験研究データ解析用プログラムの開発

II 著作他

1) 「マイクロコンピュータを用いたスピードリーディングの訓練効果とトレーナーの開発」ICU教育研究, 1983

2) 項目執筆 教育社会学辞典 東洋館出版

III その他

1) アスク講談社 教育工学研究会(1982年6月25日)で「学習の理論とCAI」を講じた。

2) 日本視聴覚教育学会第19回大会(筑波大学1982年11月29日)において課題研究「大学におけるメディアセンター」の提案者をつとめた。

3) 日本視聴覚教育学会常任理事

4) 日本教育工学雑誌編集委員

理科教育法研究室

三宅彰教授および田坂興亜準教授は一年間の研究休暇を終え、それぞれ1982年4月および9月に帰任した。なお勝見允行教授は1983年9月より一年間の研究休暇に入った。

三宅彰教授

I 研究活動

1982年8月1日よりシカゴ大学シェームズ・フランク研究所に6ヶ月間客員研究員として滞在。K・F・フリード教授との協同研究題目はくりこみ群の方法の鎖状高分子への応用、特に量形高分子の統計への応用。

昭和58年度文部省科学研究費補助金総合研究A「高分子の集合体形成と機能発現機構に関する理論的研究」分担研究者。

II 学会発表等

1) Polymer Chain Statistics in Relation to the Brownian Process, Dept. of Chemistry, Illinois Institute of Technology, Chicago, 1982年9月24日

2) Stiff Chain Statistics as a Study in Brownian Process, Dept. of Chemistry, Univ. of Wisconsin, Madison, 1982年10月18日

3) Excluded Volume Effects on Starpolymer Statistics, Workshop on Dynamics of Macromolecules, Institute for Theoretical Physics, Univ. of California, Santa Barbara, 1982年12月14~18日

4) Excluded Volume in Star Polymers—Chain Conformation Space

Renormalization Group, Laboratoire de Leon Brillouin, Centre d'Etudes Nucleaires de Saclay, France, 1983年1月24日

- 5) くりこみ群の方法による星形高分子の形態, 科学研究費総合研究A「高分子の分子運動と相形成に関する理論的研究」京都研究会, 1983年2月8~10日
- 6) 高分子鎖の形態とスケーリング則, 東京農工大学一般教育部物理教室夏期セミナー, 湯の丸荘, 1983年7月22~25日

Ⅲ 著 作

- 1) 三宅彰・瀬川渡共訳: A.R.Blythe原著「高分子の電気的性質」, 培風館, 1982年9月30日発行
- 2) 三宅彰: 臨界現象の普遍性からみた高分子物性—P.-G. de Gennes, 高分子32巻1月号(1983) 44-47頁
- 3) A. Miyake and K.F.Freed: Excluded Volume in Star Polymers—Chain Conformation Space Renormalization Group, Macromolecules (in press)
- 4) 三宅彰: くりこみ群の方法による星形高分子の形態, 「高分子の分子運動と相形成に関する理論的研究」昭和57年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書(昭和58年3月) 16-24頁
- 5) A. Miyake and K.F.Freed: Mean Inverse Intersegment Distances in Star Polymers, Repts. Progr. Polymer Phys. Japan, 26 (1983)
- 6) A. Miyake and K.F.Freed: Segmental Density Distribution in Star Polymers, Repts, Progr, Polymer Phys. Japan, 26 (1983)

Ⅳ そ の 他

財団法人大学セミナーハウス常務理事, 評議員

柿内賢信教授

Ⅰ 研究活動

液体の水の構造と核磁気緩和
 水の表面張力に及ぼす液体構造の影響
 現象と解釈について

Ⅱ 学会発表

「事実の呈示について」
 一般教育学会第5回大会 1983. 6. 12

Ⅲ 著作と論文

“Creativity for Development” in Report of Costarica Conference of CONICIT (1983)
 「科学基礎論への社会学的排戦」

科学基礎論研究16巻(1983) No1 / 2

IV その他

講演

「過去を分ちあう」

三鷹市教育委員会・ICUセミナー 1982. 10

「小学校低学年理科の根源をさぐる」

小学校理科研究第1巻(1983) 5月

1982. 12. 6 中教審教育内容小委員会

参考人陳述 「初等中等教育における理科教育の在り方について」

役員

財団法人促進会理事長

一般教育学会理事

グレゴリオ宗教音楽研究所理事

学校法人音羽幼稚園理事

1982・12-1983・1 チュラロンコン大学, 一般教育研究協力(タイ)

1983・1 東南アジア地域高等教育研究所訪問(シンガポール)

ドナルド・C・ウォース教授

1. Solar Energy utilization studies, with particular attention to various types of collectors (non-concentrating and concentrating) for thermal and electrical energy utilization.
2. Preparation of "Notes" (to be published as text material) to accompany the "Landmark Papers" in a general education course (NS II) on Development and Application of the Energy Concept.

石川光男教授

I 研究活動

1. 生体高分子に対する放射線効果
2. 理科教育における総合的評価法の開発と分析
3. 大学教育におけるマークカードとマイクロコンピューターの利用法
4. 科学と宗教に関する学際研究

II 学会発表等

1. 日本物理学会分科会(1982年10月3日, 北海道大学): 高校物理の学習評価と分析
2. 日本放射線影響学会(1982年10月7日, 秋田市): 真空紫外線, 遠紫外線による

プラスミドDNAの主鎖切断

3. 第4回学際研究会議 (1982年12月11日, 東京): 総合的生命観と学問
4. International Congress on the Role of Spirit in Science (1983年, 5月12日, Fez, Morocco), Consciousness as one of Important Parameters to Understand Man and Nature.
5. 日本意識工学会 (1983年5月26日, 東京) 科学における精神の役割
6. International Congress of Radiation Research (1983年7月3日, Amsterdam), Electrophoretic Studies on Single Strand Breaks in Supercoiled DNA Caused by Vacuum and Far UV Radiations.

Ⅲ 著 作

1. Single Strand Breaks in Supercoiled DNA by Vacuum and Far Ultra Violet Light by Gel Electrophoresis; J.Radiation Research, Vol, 24, No.1 (1983) 66 (K. Takakura, M. Ishikawa)
2. Electrophoretic Analysis of Calf Thymus DNA Degradated by Far Ultra Violet Light; Repts. Progr. Polymer Phys. Japan, 25 (1982), 737-740, (K.Takakura, M.Ishikawa)
3. Thin Layer Chromatographic Analysis of Poly rA Degradated by Far Ultra Violet Light; Repts. Progr. Polymer Phys. Japan, 25 (1982), 741~742, (M.Ishikawa, K.Takakura, M.Adachi)
4. Electrophoretic Studies on Single Strand Breaks in Supercoiled DNA caused by Vacuum and Far UV Radiations; Proceedings of the Seventh International Congress of Radiation Research, A3 - 42 (1983), (K.Takakura, M.Ishikawa, K.Hieda, K.Kobayashi, A. Ito, T.Ito)

Ⅳ そ の 他

1. 対談: 「科学の新しいパラダイム」, 『特許と企業』No.176 (1983), 2-8
2. 「見えない世界の科学」, 『新天地』, 8月号, 1983年, 14-17
3. 講演: 「現代科学と精神」, 若手研究者の集い, 1983年8月27日 (東京)
4. 飛騨福来心理学研究所顧問
5. パブリック・ヘルス・リサーチ・センター設立発起人

勝見允行教授

Ⅰ 研究活動

植物ホルモンの作用機構に関する研究。特にジベレリンの膜機能に対する影響, 糖代謝への影響。新しいホルモンブラシノライドの生理作用。

Ⅱ 学会発表

- 1) 風間晴子・勝見允行・舛本寛, キウリ下胚軸伸長と表及葉緑体デンプン生成1. ジベレリンによる調節, 日本植物学会第47回大会 1982年9月東京
- 2) 風間晴子・勝見允行, 細胞伸長における浸透ポテンシャルの役割とその調節。植物化学調節研究会, 昭和57年度大会 11月東京

Ⅲ 著 作

- 1) Katsumi. M., D.E.Foard and B.O.Phinney, Evidence for the translocation of gibberellin A3 and gibberellin-like substances ingrafts between normal, dwarf 1 and dwarf 5 seedlings of Zea may S.L. Plant Cell Physiol. 24 : 379-388 (1983)。
- 2) Phinney, B.O., 勝見允行, ジベレリン生合成の概括, 植物の化学調節 17 : 106-115 (1982)
- 3) 勝見允行・増田芳雄編, 実験生物学講座15, 植物生理学 I , pp.312, 同16 植物生理学 II , pp402, 丸善, 1983

Ⅳ そ の 他

- 1) 根における水の吸収と移動, 理科資料 (三省堂) No. 20 : 5 (1983)
- 2) 高等学校生物教科書 (分担執筆), 三省堂, 1983
- 3) 百科年鑑 (平凡社) 1983, 生物学項目編等, 2項目執筆
- 4) 新百科辞典 (小学館) 40項目執筆
- 5) 講演 : 国際基督教大学における CAI, IBM教育機関イングストリー, エグゼクティブ・セミナー, 1983年5月, 天城
- 6) Plant Cell Physiology (日本植物生理学会誌)

編集委員

植物化学調節研究会編集委員

International Plant Growth Substances Association, member.

山口俊夫教授

Ⅰ 研究活動

1. 筋疲労における興奮収縮連関
2. 除神経処理と昆虫の神経筋接合部機能

Ⅱ 著 作

カエルについて一言 (随筆), 福音時報1982年10月号

Ⅲ そ の 他

日本動物生理学会第5回大会準備委員

田坂興亞準教授

Ⅰ 研究活動

1982年11月30日より1983年8月31日迄、国際協力事業団の理科教育専門家としてタイ国へ派遣され、タイ文部省教員養成局及び東北タイのスリン教員養成大学において理科教育向上のための活動を行なった。

II 著 作

高等学校化学（大日本図書）、共著、1983年3月31日文部省検定済

英語教育研究室

1. 1982年9月8日、MITのAlec Mrantz氏を呼んで言語学の討論を開く。大学院生等、約10名参加。
2. 1982年9月22日、24日、University of WashingtonのJoe Emonds教授を招いて、言語学のセミナーを開く。参加者約60名。
3. 1982年11月11日、Reading UniversityのPauline Robinson氏が、英語読解力について講演を行なった。
4. 1982年11月17日、マラヤ大学言語センター所長、Hajah Asmah Haii-Omar教授来訪語学教育についての情報交換を行なう。
5. 1983年4月、井上和子教授、日本言語学会会長に就任、同事務局がERB-241号室におかれる。
6. 1983年7月27日、日本電電公社、武蔵野電気通信研究所見学、大学院生等約20名参加。
7. 1983年8月20～21日、八王子の大学セミナーハウスにて、英語教育専攻の大学院生によるセミナーが開かれる。約20名参加。
8. 1983年8月23日、24日、27日、28日、29日、ICU国際学術交流基金の援助を得て、東京言語セミナーICU分会主催で、「生成文法：標準理論からGB理論」のセミナーが理学館で開かれる。W.O'Neil (MIT), D.Pesetsky (University of Southern California), R.Mey (Columbia University), O.Jaeggli (University of Southern California) 氏等が講師として参加。約200名参加。
9. 1983年8月25～26日、語学科と協力、理学館にて、第22回ICU夏季言語研究会を開く。参加者約180名。

井上和子教授

I 研究活動

- (1) 文部省科学研究費 特定研究『情報化社会における言語の標準化』の「明確で論理的な日本語の表現」研究班の研究代表者。(日本語の文-文法と談話文法の相関関係、文の長ささと複雑さの談話理解に及ぼす影響)

- (2) 文部省科学研究費，特定研究『学術動向の調査研究』「言語学班」の代表者，（言語学の諸分野の研究動向調査，言語学の発展に寄与した諸要因と，将来の見通しに関する報告書作成中）。
- (3) 放送文化基金による「日本語の談話構造」の研究代表者。（放送に見られる談話構造の特色。英語の放送文との比較）
- (4) 科学技術庁，航空・電子等技術審議会電子技術部会，人工知能分科会において，言語学からの接近法について研究。

II 学会発表等

- (1) 特定研究『言語の標準化』シンポジウム，「言語構造から見た言語の標準化」
1982年11月20日
- (2) カナダ，British Columbia大学での講演，“Some Special Uses of Japanese Polite Forms in Public Speaking” 1982年11月30日
- (3) 同大学講演，“Japanese culture and writing system.” 1982年12月1日
- (4) 同大学講演，“A lexicalist grammar of Japanese complex predicates.”
1982年12月3日
- (5) カナダ，Unnierscty of albertaにおける講演。“Relativization, its function in discourse” 1982年12月2日。
- (6) 特定研究『言語の標準化』シンポジウム，「文の長さと複雑さ」1983年2月26日。
- (7) 科学技術庁，航空・電子等技術審議会電子技術部会，人工知能分科会における発表会，「言語学に特徴的な接近法」1983年4月15日
- (8) 日本言語学会第86回大会において，会長就任記念講演，「文－文法と談話文法の接点」1983年6月11日
- (9) 情報処理学会，特別講演，「日本語文法の問題点」1983年6月16日
- (10) 津田塾大学同窓会夏季セミナー「日英語談話構造の比較」1983年8月22日

III 著作

- (1) 『日本語の基本構造』編，著，三省堂，pp.343.t.viii執筆部分1-77，127-151，1983年8月
- (2) 『国語年鑑』「第一部展望，一言語学」18-21，1983年7月
- (3) 「言語構造から見た標準化」柴田武編『言語の標準化の基礎』56-61，78-81，89-91，1983年2月
- (4) “Honorifis and Polite Forms is Public Speaking,” in K.Inoue (ed.), 9-36, 1983年1月
- (5) 「語彙文法」『言語』1982. Vol.11, No.12, 65-71
- (6) 編集『言語学研究の動向』，文部省科学研究費，特定研究研究報告書，1983年3月
- (7) 編集『日本語談話構造の研究』放送文化基金，研究中間報告，1983年1月

IV その他

- (1) 「国際言語学会議を顧みて」朝日新聞, 1983年9月24日, 夕刊
- (2) 「報告, 第13回国際言語学会議」井上和子 「事務局から」『言語』, 1983 Vol.12, No.1, 83-84
- (3) 「第13回国際言語学会議報告記」『英語青年』 Vol. cxx VIII No.9, 592-593
- (4) 「方僻名の氾濫」『月刊国語教育』1983年2月号, 50-51
- (5) 「人文・社会科学振興のための学術交流」『学術月報』 Vol.35, No.10, 656-660
- (6) 「高等教育の課題と展望を語る」香月秀雄氏と対談, 『文部広報』58年1月10日
- (7) 講演「英語を学ぶ楽しみ」目白女子短期大学, 1983年6月29日
- (8) 科学技術庁, 航空・電子等技術審議会, 電子技術部会, 人工知能分科会専門委員
1983年2月～
- (9) 文部省学術審議会委員, 1978～
- (10) ユネスコ国内委員, 1978～
- (11) 国際言語学者常置委員会 (CIPL) 実行委員会委員, 1982～
- (12) 東京外国語大学アジアアフリカ研究所運営委員, 1978～
- (13) 日本言語学会会長, 1983～
- (14) *Linguistis* (published by Mouton) の編集委員, 1981～
- (15) *Natural Language and Linguistic Theory* (published by D.Reidel Publishing Co.) の編集委員, 1982～
- (16) *Papero in Linguistics* (The Pennsylvania State University) の編集委員, 1982～
- (17) 大学英語教育学会評議員, 1974～
- (18) 大学基準協会入試委員会委員, 1970～

小林栄智教授

・昨年秋から共同執筆してきた「新高校英語Ⅰ」はようやく文部省の「条件つき検定済」というところまでこぎつけた。「条件つき」というのは検定官の出した instructions, これは執筆者が義務的に修正しなければならない項目, および Suggestions, これは執筆者に判断, 扱いがまかされた項目, に定められた期日までに結論を出して, 文部省に再提出しなければならないことを意味する。これらの作業も終了し, あとは「検定済」を待つのみである。

この「英語Ⅰ」が現場の高校でどのように受けとられるか, どんな批判がでてくるか, に興味に移ることになる。

現在「英語Ⅱ」の執筆作業が進行中である。

- 「Basic Practice in English Pronunciation」 (監修), 三修社, 1983, 2月, 80頁
 「Intermediate Practice in English Pronunciation」 (監修), 三修社, 1983, (進行中)
 書評: 「松浪有・池上嘉彦・今井邦彦編『大修館英語学事典』(本文1177頁, 大修館, 1983)」, 「週刊読書人」(4枚)

リチャード・リンディ教授

I 研究活動

Teaching “Teaching Methods” in English to new non-Japanese missionary teachers.

- 1) CoC Schools Council Summer Seminar (one week, Yatsugatake, July-August, 1983) 20 participants.
- 2) Lecture to Kyodan missionaries, 2½ hours, September 1983 (50 people)
- 3) 2 lectures to Lutheran's (Ichigaya Lutheran Center) total 4 hours. November-December 1983 (10 people)
- 4) Lecture on “AV in English Teaching,” Miyagi Gakuin, November (full auditorium)

Research:

On-going Monbusho sponsored research with others (The faculty members of FEP) on the Standardization of College English Teaching.

Private:① Continuing study of English phonology and phonetics for practical purposes—Advanced English pronunciation for Japanese.

- ② Communicative processes—a development of Joos' Theory of levels to include non-linguistic features of communication.

II 著作

Kairyudo. “New prince” (Monbusho-text)

A continuing work; now an ‘author’ rather than ‘editor.’ Other texts-editing, co-authoring, etc.

村木正武教授

I 研究活動

1. Montague文法理論と日本語の統語範疇
2. 日本語の談話構造

II 学会発表等

1. 「日本語規則動詞の音韻分析」, 日本電電公社, 武蔵野電気通信研究所, 1983年7月27日
2. “Montague Grammar: an introduction, its strengths and weaknesses”, 東京言語学セミナー, ICU, 1983年8月27日

III 著 作

1. “Some non-arguments against transformational analysis of reflexives”, *Papers in Japanese Linguistics*, 8.169-176, 1982.
2. “Linguistic anomalies and non-linguistic anomalies”, *Descriptive and Applied Linguistics*, 16.141-152, 1983.
3. 「生成意味論とモンタギュー文法」, 『月刊言語』, 第12巻第5号, 107-117, 1983年
4. 「視点と意味構造」, 井上和子編『日本語の基本構造』(講座:現代の言語, 第1巻), 東京:三省堂, 152-169, 1983年

IV その他

1. 1983年4月, 日本言語学会事務局長
2. 1983年, 日本英語学会設立発起人, 同編集委員

F.C.パン教授

I 研究活動(1) (1982-83)

My research in this academic year divided into three areas: (1) Linguistics (including Sociolinguistics and Historical Linguistics), (2) Neurolinguistics, and (3) Sign Language. The first area focussed on discourse analysis and the preparation of a textbook to be published later entitled 言語社会学. The second area involved research to be undertaken during my sabbatical (1983-84) such as language functions and brain organization. The third area is a continuation of sign language research that has been carried out every year for the past ten years or so, mostly in relation to the compilation of a Japanese Sign Language Dictionary.

I also organized the annual events of: (1) The 6th ICU Language Sciences Summer Institute (August 9—20, 1982), (2) The 6th ICU Conference on Child Language (August 21, 1982), (3) The 8th ICU Conference on Sociolinguistics (August 22, 1982), (4) The Second International Conference on the Language Sciences (Theme: Language in a Semiotic Frame, August 23-24, 1982), and (5) The 4th ICU Conference on Neurolinguistics (August 28-29, 1982).

研究活動(2) (1983-84)

Since I am on leave this academic year, my research though divided into three areas as usual is specifically directed to one topic: "Interactions and Integration of Auditory and Visual Information in Higher Cortical Functions,"

II 学会発表等

"Mental Processing of Information: A Neurolinguistic Approach" (August 24, 1982) at the Second International Conference on the Language Sciences.

III 著作

1. "Sex-Differentiation in Language Variation: A Sociolinguistic Contribution to the Language Sciences," Language Sciences, Vol. 4, No. 2.
2. Analyzing Language by Function (機能によることばの分析), edited with Koji Akiyama and Motoko Hori, Hiroshima: Bunka Hyoron Publishing Company, 1983

2. 大学院教育学研究科修士論文

1983年3月卒業者 17名

A. 教育心理学

- | | |
|-------|--|
| 弘兼 武子 | 幼児における鏡映書字に関する一研究
—左右概念学習の効果— |
| 井手久美子 | 青年期境界例少女の事例研究 |
| 陸川 厚子 | 分裂病と診断された少女との面接過程 |
| 佐藤よしみ | 乳児院一歳児の見知らぬ人への社会的行動
—面会・入所月齢および好意を寄せる人物との関係の研究— |
| 里村 恵子 | 作業療法中の集団活動が精神分裂病入院患者の交信行動に及ぼす影響 |
| 諏訪部一恵 | 異文化学習・訓練の発展とある具体的訓練計画実施の試み |

B. 視聴覚教育法

- | | |
|-------|---|
| 下 孝一 | テレビ教育番組の制作変数に関する実験的研究
—科学番組の内容構成と学習者の能力との交互作用について— |
| 早田武四郎 | 英語学習における画と文字の提示による比較実験 |
| 横田 淳子 | 外国語としての日本語の読みの能力の研究 |

C. 英語教育法

- 久富 節子 The Significance of the Concept of Opposition and its Realization in Semantics in Child Language
- 岩田 龍二 Studies in English Double Object Verbs
- 北元美沙子 A Study of Double Negatives
- 小屋 逸樹 Reference, Ambiguity and Truth Condition
- 西 泉 A Study of Perception Verb Complements in English
- 小島けい子 A Study of Japanese Passives
— A Functional Approach —
- 和田 香織 On the Analytic Character of Early Middle English:
A Study of the Construction with the Indirect
Object in “Ancrene Riwe”
- 安井美代子 A Study of Obligatory Control and Predication in
English

1983年6月卒業生 8名

A. 教育哲学

- 沢田 義久 パウル・ティリッヒのキリスト教思想とキリスト教教育の諸原理

B. 教育心理学

- モイヤー, 尾間康子 在日留学生の直面する心理ストレスの諸要因と対処の諸様相
- 佐野 里樹 加算作業時の視覚誘発電位による大脳半球機能差の検討

C. 視聴覚教育法

- 高柳 康雄 日本における英語学習者のリーダビリティ規定要因に関する実証的研究

D. 英語教育法

- 増岡 久実 A Study of the Five Levels of English from the
Viewpoint of English Teaching Methods
- 中沢佐企子 A Study of Metaphor
— in Comparison with Simile —
- 西島智恵子 Toward a Representation of Syntactic Markedness:
A Study of Preposition Standing in English
- 田村 洋子 A Study of Mark Twain's Use of Verbs in The
Adventures of Huckleberry Finn

3. 教育実習報告

1982年度教育実習には119名の学生が参加した。その詳細は次のとおりである。

1. 実習生総数 119名

男子 35名

女子 84名

2. 実習日程

- 5月6日～5月19日 東京学芸大学附属世田谷中（東京）、桐蔭学園中（神奈川県）
- 5月10日～5月22日 香川大学附属高松中（香川）
- 5月17日～5月29日 福島大学附属中（福島）
- 5月24日～6月5日 宮城学院中（宮城）、関東学院高（神奈川県）、県立大分上野丘高（大分）
- 5月24日～6月12日 筑波大学附属高（茨城）
- 5月27日～6月9日 和光高（東京）
- 5月31日～6月12日 聖学院高、国際基督教大学高（東京）、県立喜多方高（福島）、県立浦和高（埼玉）、東金市立東金中、市川市立第一中、市川学園（千葉）、川崎市立生田中、県立追浜高（神奈川県）、静岡市立東中（静岡）、設楽町立田口中（愛知）、同志社高（京都）、県立洲本高（兵庫）
- 6月1日～6月12日 都立井草高（東京）
- 6月1日～6月14日 桜蔭中、慶応義塾女子高、調布高（東京）、北海道教育大学附属函館中（北海道）、県立熊谷女子高（埼玉）、県立横浜翠嵐高、横須賀学院高（神奈川県）、福山市立東中（広島）、梅光女学院中（山口）
- 6月4日～6月17日 香蘭女学校中（東京）
- 6月7日～6月18日 玉川聖学院、東洋英和女学院高（東京）
- 6月7日～6月19日 江東区立深川第三中、江戸川区立小岩第三中、豊島区立千川中、世田谷区立山崎中、三鷹市立第一中、三鷹市立第六中、武蔵野市立第五中、小金井市立南中、日野市立日野第三中、立川市立立川第三中、都立町田高、都立大泉高、都立豊多摩高、都立戸山高、都立日比谷高、東京学芸大附属高、城北学園高、大東文化大第一高（東京）
 県立古川女子高（宮城）、県立福島女子高（福島）、県立石橋高（栃木）、潮来町立潮来第一中（茨城）、大宮

- 市立北中，東松山市立福栄中，習志野市立第七中，館山市立第二中，我孫子二階堂高（千葉），横浜市立青葉台中，県立横須賀高，県立荏田高，県立光陵高，横浜市立南高（神奈川），県立安城東高，南山高等・中学校女子部（愛知），大阪教育大附属高池田校舎（大阪），香川高（香川），県立脇田高（徳島），金光学園高（岡山）
- 6月9日～6月19日 春日部市立武里中（埼玉），大阪教育大附属高天王寺校舎（大阪）
- 6月9日～6月23日 道立函館東高（北海道）
- 6月10日～6月22日 埼玉大附属中（埼玉）
- 6月14日～6月25日 浦和ルーテル学院（埼玉），横浜雙葉中（神奈川）
- 6月14日～6月26日 小金井市立緑中，桐朋女子高，菊華高，女子学院（東京）
浦和明の星女子高（埼玉）
- 6月14日～6月29日 県立上田高（長野）
- 6月17日～6月30日 女子聖学院（東京）
- 6月21日～7月3日 県立外語短期大付属高（神奈川）
- 6月28日～7月10日 県立第一女子高（宮城）
- 8月21日～9月3日 藤女子高（北海道）
- 9月1日～9月14日 県立畝傍高（奈良）
- 9月2日～9月17日 山梨英和高（山梨）
- 9月3日～9月16日 都立三鷹高（東京）
- 9月6日～9月18日 目黒区立第七中（東京）
- 9月6日～9月20日 県立厚木高（神奈川），県立野沢北高（長野）
- 9月13日～9月25日 小金井市立小金井第二中（東京）
- 9月27日～10月8日 頌栄女子学院高（東京）
- 10月3日～10月16日 県立盲学校（高知）
- 10月4日～10月16日 勝田市立大島中（茨城）
- 10月25日～11月6日 名古屋学院高（愛知）

3. 学科別

学科 \ 性別	男	女	合計
人文科学科	6	18	24
社会科学科	10	2	12
理学科	4	7	11
語学科	6	30	36
教育学科	5	23	28
教育学研究科	1	3	4
行政学研究科	0	0	0
比較文化研究科	0	0	0
聴講生	3	1	4
合計	35	84	119

4. 教科別

教科 \ 性別	男	女	合計
社会	9	1	10
理科学	3	5	8
数学	2	2	4
英語	21	76	97
宗教	0	0	0
合計	35	60	119

5. 教員免許状取得状況

1983年3月卒業生363名中、教員免許状を取得した学生の詳細は次のとおりである。

(聴講生を除く)

教養学部

学科	免許状取得者 実数	中学校教諭 一級免許状	高等学校教諭 二級免許状
人文科学科	13	11	13
社会科学科	6	3	6
理学科	8	7	8
語学科	29	24	29
教育学科	17	14	17
合計	73	59	73

学 科	社 会		理 科		数 学		英 語		宗 教	
	中学 一級	高校 二級	中学 一級	高校 二級	中学 一級	高校 二級	中学 一級	高校 二級	中学 一級	高校 二級
人文科学科							9	13		
社会科学科	2	3					3	3		
理 学 科			6	6	1	2				
語 学 科							24	29		
教育学科		1					14	16		
合 計	2	4	6	6	1	2	50	61		

教育学研究科	理科教育法	0
	英語教育法	1
行政学研究科		0
合 計		1

6. 教員就職状況

公立中学校： 男1名（英1） 女5名（英5）
 公立高等学校：男4名（英4） 女4名（理1，英3）
 私立高等学校：男3名（社2，英1） 女4名（数1，英3）

4. ひ と の う ご き

■新任・就任

佐藤 尚子助手 （非常勤）（教育学）：83年4月より着任。
 松浦 良充助手 （非常勤）（教育学）：83年4月より着任。
 永井 史助手 （非常勤）（心理学）：82年12月より着任。
 石塚 正一助手 （非常勤）（心理学）：83年4月より着任。
 越野 英哉助手 （非常勤）（心理学）：83年4月より着任。
 佐々木輝美助手 （非常勤）（視聴覚教育）83年4月より着任。
 山口 紀子助手 （非常勤）（心理学）：83年4月より着任。
 立川 明助教授 （教育学）83年4月：学務副学長補佐に就任。

■休職・帰任

三宅 彰教授 （物理学）：83年4月：一年間の休暇より帰任。
 都留 春夫教授 （カウンセリング・ガイダンス）：82年9月：一年間休暇より帰任。
 長 清子教授 （思想史）：82年12月より83年11月迄休暇。
 星野 命教授 （心理学）：83年9月より84年8月迄休暇。
 勝見 允行教授 （生物学）：83年9月より84年8月迄休暇。